
C-LASTY

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C－LASTY

【Nコード】

N7501L

【作者名】

春

【あらすじ】

記憶を失った少女のお話。

少女は過去をとりもどすために、旅をすることを告げる。

そして・・・

序章1（前書き）

ゆっくり更新していくつもりです。
とりあえず、序章。どうぞ。

序章 1

ハア・・・ハア・・・

・・・ハア・・・

森の中を、誰かが走っている。

あたりは暗く、森がうるさいほどにざわついている。

ハア・・・ハア・・・

逃げなきゃ・・・

一人の少女が走っている。

少女は髪が長く、背は150後半あたりだろう。

着ている服はところどころ裂けていて、左足は太ももまで見えている。

長い脚は負傷しており、ところどころ血が流れ出ていた。

「あっ!!」

暗くなったせいで視界が悪くなってしまったのだろう。

少女は太い根が土から出ていたのに気がつかず、転んでしまった。

ハア・・・ハア・・・

も・・・

もう・・・だ、だめかもしれない・・・

そう思った時だった。

暗い森が急に明るくなった。

・・・え？

その瞬間、ものすごい熱風が少女を襲う。

大木は風圧で斜めに傾き、少女は葉とともに吹き飛ばされた。

「う・・・」

目をあけると、自分は落ち葉の上に倒れていた。

落ちたところが落ち葉の積もったところだったため、運よく助かったのだろう。

よかった。助かった。

一安心したのもつかの間、少女は腕につけていたお守りがないことに気がついた。

小さな紅色の石。さっきまで一緒に遊んでいた、好きな男の子にもらった大事な大事な石。

少女は石をひもにくくりつけ、腕にお守りとしてつけていた。

こんなところで失くすわけにはいかない。

あたりを見回してみると、2、3メートル先に紅い小さなものが光っている。

きつとあれだろう。

少女はそれを手に掴んだ。

手に掴んだ、その時。

そいつはやってきた。

自分がずっと逃げ続けていた相手であり。

男の子と離れ離れになってしまった原因。

それは、一匹の翼の生えた怪獣だった。

序章2（前書き）

状況の描写が分かりにくいと思いますが・・・うう。

序章 2

怪獣の羽は赤黒く、血のような色をしている。

巨大な体は暗い緑色であった。

「ゴアアアアアアアア！！！！！」

ものすごく大きな声。耳が痛い。

しかしそんなことは言ってられない。逃げなければ。

逃げなければ、また火を吹かれて飛ばされてしまう。

もしかしたら焼き尽くされて死んでしまうかも・・・

少女は頭を振った。

だめ。余計なことを考えてはいけない・・・。

走れと身体に言い聞かせ、少女はよろめきながらも走り出した。

ハア・・・ハア・・・

しばらくして少女は立ち止まり、後ろを振り返った。

急いでいるのに。こんなに一生懸命走っているのに。

怪獣との距離は一向に縮まっていない。

怪獣は今もお、自分と同じ北を向いて火を吹いていた。

どうしたらいい・・・。

いくら走って逃げたとしても、こちらの方に火を吹かれては終わり。

いつそ怪獣に近づいて後ろにいるとか・・・？

しかし・・・あれほど大きな怪獣だ。踏みつぶされてしまうかもしれない。

それにもし視界に入ってしまったえば、それこそ命はない。

どうすれば・・・。

その時少女にある場所が浮かんた。

好きな男の子と作った二人だけの場所、秘密基地。

ある日男の子が、この森の端にある岩山に洞窟があることを見つけて少女に教えた。

それからそこは、二人だけの場所となっていた。

あそこに行けば・・・。

少女は前を向き、また一步一步進み始めた。

ここをまっすぐ行けば着くはず・・・。

・・・もしかしたら男の子もそこにいるかもしれない。

淡い期待を抱きながら、少女は速度をあげて再び走り出した。

空は黒い雲に覆われていたが、やがて雨が降り出した。

大雨だ。

急がなくちゃ・・・。足場も悪くなってきた・・・。

少女が慎重に走り始めたその時。

ピカッ！！

空に照らされ、少女は気づいた。

大きな影が、ひとつ。

自分の周辺を黒に染めていた。

序章3（前書き）

短いんだぜ

序章 3

そんな・・・。

その大きな影は、少女が予想したそいつ以外に当てはまるものがあった。

ザアアアアア——・・・

少女は雨に打たれたまま、動けなかった。

怪獣は赤い翼を大きくはばたかせ、少女を空から見下ろしていた。

少女はゆっくりと空を見上げた。

怪獣は狙いをつけたかのように目を細めた。

少女は空を見上げたまま、地面にへなりと座り込んだ。

怪獣は口を大きくあけて、
ー・・・

熱風を感じた瞬間、少女の視界がまぶしいほどに明るくなり、すぐに暗くなっていった。

•
•
•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
○

・
・
・
・
・
・
し
い、
し
い

・
・
・
・
・
・
|
い
。

しい――
・
・
・
。

大好きだった、男の子の
声がする。

自分の名前を呼んでいる。

ああ・・・。

だんだん遠のいていく。

・・・ねえ、待って・・・。

やがて少女は意識さえも闇に包まれていった。

序章3（後書き）

序章おわりです！

長かったね、ごめんね＞＜；

次から本編に入っていると思うので、次もまた読んでくれると嬉しいです^^

第一話

何も見えない
・
・
・
。

真っ暗な世界。

「うぁあぁっ……！」

「……起きた？」

口から叫び声が漏れている。

自分は一体———・・・？

6歳の女の子がこちらを覗きこんでいる。

・・・ああ、そうか。

しいはようやく現状を把握した。

・・・夢を見てたんだ・・・。

自分の人生が大きく変わった、あの日の夢を。

しいは深呼吸をすると、額の汗をぬぐった。

夢を見ていた彼女の名前は、しい。

怪獣に襲われて周りの人は皆死んでしまいが、なぜか一人だけ生き残った不思議な女の子。

彼女には昔の記憶がいっさい無く、覚えているのは夢に見るあの日のことだけ。

洞窟の前で倒れていたところを研究者であるルージュに発見され、家に運ばれる。

それから数カ月後（ルージュ曰く3カ月後）、ようやく目を覚まし、今日で二週間がたつ。

そして、しいのそばにいた6歳の女の子はハロ。

ルージュの妹で、兄と一緒に生活している。

しいが運ばれてからはずっと、しいの看病をし続けている優しい女の子。

「クロロ、お兄ちゃんにしい姉が起きたって伝えてきて」

クロロと呼ばれた生き物は、2、3回うなずくとパタパタと飛んで行った。

クロロは小さな猫のような耳が上にちょこんと生えているピンクの丸っこい生物。

しっぽは紐のようで、綺麗な澄んだ碧い丸いものがついている。

羽は白く、パタパタとはばたかせ常時飛んでいる。

>i7906—1237<

実はしいの癒しのペット。

しいがこの家に来て二日後、遊びに行っていたハロと一緒に帰ってきた。

正確に言えば、ハロに尻尾をひっつかまれ強制的に連れてこられた。そしてその日にクロロと命名され、家に住むこととなった。

「しい姉、大丈夫？」

ハロが優しく声をかけてくれる。

「ああ・・・うん、大丈夫」

嘘。本当はすごく眠りたい。

脳がまだ睡眠を求めている。

しかしあの夢を見た後のせいで、目が覚めてしまった。

ものすごくだるい。

しいは重たい身体をゆっくり起こしながら、ゆっくりと息を吐いた。

ずっとこの夢ばかり見ている。

意識が戻ってから、ずっと。

しいが色々考えていた、

そんな時。

眠気も消えてしまうほど派手で豪快な音を立てながら、あの赤髪のうるさいやつがやってきた。

第一話（後書き）

クロロを書いてみた（・ω・）
へたくそですが、イメージとして伝わったら嬉しいです（*、A、*）

第二話

・ ・ ・ どん どん どん どん たっ！ どん っ！

「……！」

・ ・ ・ 。

・ ・ ・ どん どん どん どん どん っ！

バンッ！……！

赤髪の男が勢いよく部屋に入ってくる。

「しい！！大丈夫か！！！！」

ああ……。きた……。きた……。

「お兄ちゃんうるさいよ！」

お兄ちゃんと呼ばれるそいつは、ハロの兄ことルージュ。

前に述べたとおり、しいを洞窟の前で発見した張本人。

研究に熱心なのはいいが、没頭しすぎると3～4日は研究室からでてこない。

何を研究しているかはハロさえも知らない。

ただ研究室の前をハロが通った時、電話をして連絡をとり合ってい

るのを何度か耳にしたことがあることから、どうやら研究は複数で、それぞれ個人個人で調べているらしい。

しいの腕につけてあるしいのお守りと、クロロに興味がある。

「しい、また暴れてたそうだな。怖いぞお前。」

「しい姉はうなされただけだよお兄ちゃん！暴れてなんかないよ！」

「あれ？そうなの？でもクロロが……。」

クロロはぶんぶんと頭を振る。

ルージュ……。クロロは喋らんぞ……。

「クロロ、そうなの？」

ハロがクロロの目をのぞきこむ。

まったく。クロロに罪をなすりつけた上にハロまで騙して・・・。

「クロロ。」

しいが優しく呼ぶ。

クロロはパタパタとしいのもとにやってくると、掌にちょこんとつけた。

しいが頭をふにふになでてやると、嬉しそうに目を閉じた。

「お前じゃないって分かってるから。」

しいがそうつぶやくと、クロロの目がぱちっと開き、キラキラした目でしいを見つめた。

「たはー。ばれたか！」

ルージュが頭をかきながら笑う。

「お前……。クロロがかわいそうだろ。あとハロを騙すな。」

「そんな睨まないでよいちゃん。ほんの軽い冗談だよ。」

「お兄ちゃんの嘘つきー！」

「ごめんごめん！」

妹に謝ったあと、ルージュはクロロにも「ごめんな」と謝った。

「さて、しいも目を覚ましたし……。ハロ、しいまだ起きたばかりだから、ご飯持ってきてあげな。」

「はーい。」

ハロは元気よく返事をする、一階へと降りて行った。

「・・・しい。」

真剣な表情のルージュ。

「なんだ。またこれのことか？」

しいが腕をあげてお守りを見せつける。

しいと二人きりになると、ルージュは毎度のようにお守りのことを詳しく聞いてきた。

「記憶がないんだ。これのことさっぱり・・・」

「しい。」

もう一度ルージュが呼ぶ。

どうやら言いたいことはこれじゃないらしい。

「・・・なんだ。はっきり言え。」

「・・・実はな・・・」

長い沈黙の後、ルージュが口を開きかけたと同時にガチャっというドアの開く音。

ハロが食事を片手に部屋に入ってきた。

「持ってきたよ・・・どうしたの？真剣な顔して。」

ハロがじろじろとルージュの顔を見つめる。

ルージュは急いで頬をあげて、いつもの顔を作った。

「あ、ああ・・・！な、なんでもないよ！さ、しい食べな！今日は俺が作ったからおいしいぞ。」

顔をあげると、ルージュが口パクで「後で」と言っていた。

・・・何かあったのか？

ルージュがあれほど真剣な顔するのはあまり見たことがない。

まあいい。後でわかることだ。

ルージュとハロが楽しそうに話すのを見つめながら、しいはゆっくりとご飯を口に運んだ。

第二話（後書き）

ルージュやつとキタアアアー（。▽。）——！！↑
赤髪大好きな私めでございます。
感想などあれば書いていただけると嬉しいです。

第三話（前書き）

期末もやっと終わったのでお久しぶりの更新です！

第三話

ハロとルージュが楽しそうに話している中、しいは朝食を食べていた。

しいは二人の姿を見ながら、ぼんやりと過去についていろいろ思い出そうとしていた。

・・・なんで思い出せないんだろう。

・・・どうしてあの事件だけなんだろう。

せめて……。せめて男の子の顔や名前だけでも覚えていたらよかったのに……。

自分を責めながら、しいはふと思った。

そういえば、この家で初めて目覚めたときの記憶もあまりない。

無意識に何度も叫んだような気はするが……。曖昧だ。

いつからかクロロやハロと話すようになって……

「しい姉、どうしたの？」

どうやら少し口に出ていたようだ。

「いや、なんでもない……。それより食べ終わったから食器さげてくる。」

「お姉ちゃんは具合が悪いんだから、休んでて。私さげるよ！」

そう言ってハロは食器をしいの手から奪うと、ガチャガチャと食器を震わせながらゆっくり部屋から出て行った。

また、こいつと二人きり……。か。

「しい、大丈夫か？調子は・・・」

「ああ、大丈夫。」

「さっき、記憶を思い出そうとしていたのか？」

「・・・まあ。」

「俺もできるかぎりのことはしてやるからな！ゆっくり記憶を思い出していけばいいさ。」

そういうと、ルージュはしいの頭に手をポンとのせた。

しいは顔をあげ、ルージュの顔を見た。

「なあ、ルージュ。」

「ん？どうした？」

「さっき言おうとしてたことは何だったんだ？」

さも今思い出したかのようにああ、というと再びさっきの真剣な顔に戻って言った。

「あのな。」

さっきよりも空気が重くなっている気がする。

そんなに大事なことなのか。

しいが黙ってルージュを見つめると、重たそうな口をようやく開いた。

「・・・実はな、俺にはもう一人兄弟がいるんだ。」

しいは気が抜けたようなマヌケな顔をしてしまった。

当然だろう。しいには関係のないことだし、第一いたからなんだというのだ。

しいがそんなことを思ったと同時にルージュが突然笑い出した。

「ははは、お前そんな顔もするんだなあ！」

「お前・・・話ってこれのことだったのか？そんな真剣な顔してくだらないことを・・・」

しいはだんだん苛立ってきた。

「っははは！ちょっと落ちつけ。って俺もだな！ははは！まあ、も

う少し話を聞いてくれ。」

「早く言え、馬鹿。」

「怒るなって。まあそいつ、兄弟っていうよりも双子の弟なんだけどな。前、お前が唯一記憶にあるあの事件に巻き込まれたんだ。」

「え．．．？」

なんだって．．．？

あの事件に．．．。

「それほど被害もなかったからしいより早く目は覚めてるけどな。今は自分の研究室で研究をしながら、同時に事件についても調べてる。」

そうだったのか・・・。

あの森にたまたまいて事件に巻き込まれてしまったのだろう。

私の鮮明な記憶が再び蘇る。

―大雨の中、雷が轟く―

―真っ赤な炎。真っ白な視界―

―そして・・・真黒な世界―

脈拍が速くなってくる。

しいは目を閉じて、ルージュを訪ねた。

「そいつに会うことはできるのか？」

ルージュは少し驚いた顔をした。

「会う？」

「ああ。そいつ事件のこと調べてるんだろ？だからそいつに会って事件について詳しく聞きたいんだ。」

ルージュはしばらく顎に手を当てると、ぱっと手をもとに戻して笑顔になった。

「そいつは良い考えかもしれないな！じゃあ、俺はそいつにいいの
ことを連絡しておくよ。」

「・・・ああ、頼む。そう言えば、名前は？どんなやつなんだ？そ
いつって・・・」

「名前はアイ。身長は俺と同じくらいだが・・・そういう力が強いな、あいつ。」

そう言って、くすつとおかしそうに笑った。

今日よく笑うな。機嫌がいいんだろう。

「髪はやっぱり赤なのか？お前と同じで。」

ルージュは笑うのをやめるとしいの顔を見て言った。

「それはアイに会ってからのお楽しみということ♪」

「なんでだよ。教えてくれたって・・・。」

「それよりもアイの研究所は相当遠いぞ。あの森を抜けて川を横切ってさらにいくんだからな。」

あの森を通って行くのか……。

いや、事件について……。もしかしたら自分の過去のこと何か思い出せるかもしれない。

しいは前向きに考えた。

そして大丈夫だと言うと、一呼吸おいて、自分の決意を真剣なまなざしと共に口にした。

「旅に出て、私は記憶を取り戻しに行く。」

ゆるぎない言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7501/>

C-LASTY

2010年10月17日03時02分発行